

## ▶▶ 「ひきこもり」問題をめぐる 現状と対策

— 「ひきこもり」状態にある人への支援についての考え方や現状等について、ひきこもり、ニート、フリーター等の支援団体「育て上げ」ネットの理事長である工藤啓さんに、ご自身の考えや活動を交えて話していただきました。



特定非営利活動法人  
「育て上げ」ネット  
くどう けい  
理事長 工藤 啓 さん

### ▶▶ 「ひきこもり」状態が当事者や家族に与える影響

「ひきこもり」状態になってしまう背景は、家庭環境や、はじめや病気など実に多様である。また、いくつもの要因が複雑にからんでいるケースが多く見られる。「本人が怠けているからだ」と考える人もいようだが、私がこれまで出会った当事者で、本気で働きたくないと考えている人は一人もいない。当事者が、「就職できないかもしれない」という不安の裏返しで、自己防衛的に「自分は働く気はない」と発言してしまい、誤解を招いてしまうというようなこともあるようだ。いずれにせよ100万人とも言われる該当者がいる現状について、社会として何もしないでいてよいとは思えない。

「ひきこもり」状態は、長期化すればするほど、就労して自立することが難しくなる傾向がある。家族も「ひきこもり」の当事者のことが話題になることを避けようとして、社会との接点をなくし、家族が「ひきこもり」状態になってしまう場合がある。特に、母親は、子どもがひきこもってしまった原因が、自分の子育ての失敗にあると考え、自分を責めてしまう傾向が強い。そのため、私たち「育て上げ」ネットでも、「ひきこもり」の問題で困っている母親同士のつながりの場を提供している。

### ▶▶ 「ひきこもり」状態にある人や家族への支援対策

支援には、「発見」、「誘導」、「支援」、「出口」、「定着」のプロセスがある。

支援するためには、まず、「ひきこもり」状態の当事者を「発見」することが必要である。「誘導」とは、支援のための「場」



若年者就労基礎訓練プログラム「ジョブトレ」の一環で行われる農業体験「援農隊」

に出てきてもらうための働きかけであり、「支援」は、人間関係や職業等についての技術や自信などを身につけていくためのものである。「出口」は就職などの目標を達成することで、「定着」は、就職した状態を継続できるようにすることである。

「ひきこもり」状態にある当事者は自分から救いを求めることができず、家族も孤立しがちなため、特に「発見」と「誘導」が大変重要といえる。これまでに公的機関が行ってきた支援は、基本的には「相談に来るのを待つ」という姿勢であったため、民間の支援団体などが、「発見」と「誘導」の役割も担ってきた。

平成21(2009)年7月には、「ひきこもり」状態の人々への支援に関する基本法にあたる「子ども・若者育成支援推進法」が成立し、ひきこもり地域支援センター事業が創設されるなど、制度面での整備も進められつつあり、「発見」と「誘導」の部分についても、今後公的な対策が拡充されてくるものと考えられる。

### ▶▶ 「発見」に向けて、地域の関係者への発信

私の団体は、最初に「働く」と、「働き続ける」という、就職の継続という、「出口」と「定着」の部分の知識や経験を蓄積してきた。そのため、今後は、「発見」の部分にもより力を入れていきたいと考えている。

従来は、支援に関する情報を当事者や家族に伝えるために、マスコミを通じた活動を展開してきたが、ここ1～2年は地域への働きかけにも力を注いでいる。

「ひきこもり」状態の子をもつ親が、いきなり相談に行くことはハードルが高い場合がある。しかし、美容室や喫茶店、クリーニング店など、ちょっとしたかかわりがある場所では、ふと悩みや本音を話す場合がある。そのため、地域のさまざまな関係者に、「ひきこもり」の問題や支援に関する情報を知ってもらえれば、より、「発見」につながると考え、地域の寄り合いにも積極的に参加するなど、つながりづくりに努めている。

もちろん、どのケースでも身近な場所がよいとは限らない。誰も知り合いがないところで、「やり直したい」と思う場合もある。そのため、自宅に近い場所、少し通っていける場所、宿泊して利用できる場所と、さまざまな距離にある「支援の場」を選択して利用できることが望ましいといえる。



## 事例 1

積極的にアウトリーチする  
訪問支援の取り組み

特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス【佐賀県武雄市】

<http://www1.odn.ne.jp/nagayoswc>

特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス(以下、「SSF」)は、平成 15 (2003) 年の設立以来、不登校、ひきこもり、非行等、不適応問題を抱える子どもたちやニート、フリーター等の自立支援に取り組み、当事者の家庭にアプローチする訪問支援を行っている。

訪問活動の対象者は幅広く、小学校低学年から 50 代、60 代までとなっている。訪問件数については、年間 827 件(月ごとの契約件数の合計、平成 21 (2009) 年 3 月末現在)の派遣を行っており、そのうちの 9 割以上に、学校復帰や脱ひきこもり、進学、就職といった改善が見られている。

## 慎重さと専門性が求められる訪問支援

SSF が訪問支援する子どもや若者は、これまでの他機関等の支援ではうまくいかなかったケースがほとんどであり、関係性をつくるのが非常に難しい。

そのため、SSF では、訪問支援に入る前の準備をきめ細かく行っている。事前に保護者との打合せを重ね、保護者からの話だけではなく、SSF が指定した言葉を保護者から当事者にかけてもらったときの反応などの情報を収集し、対応方針を慎重に検討する。接触をもつ際も、当事者を身構えさせないよう、当事者の興味や関心、趣味などを切り口とした関係づくりを重視している。

そして、訪問しても最初は直接本人とは会わず、家庭のところへ外の人間が来ていることを当事者に分かるようにすることが多いという。訪問を重ね、慣れてきたところで、初めて当事者本人と会い、その後も訪問を続けるなかで当事者と支援者の 1 対 1 の信頼関係をじっくりとつくっていく。

その後も、小集団で支援者以外の人間との関係づくりに慣れたうえで、より大きな集団で活動してもらうようにしている。そのころには、支援活動に対して理解のある地域の事業主など第三者の協力を得て、就労体験も行われる。

こうした訪問支援の取り組みは、前例もなく最初は手探りの状態だったが、大学等とも連携しながら、ノウハウを蓄積し、専門性を高めてきたという。

また、支援にあたっては、当事者や家族への直接的な支援だけでなく、心理面、対人面、環境面等、さまざまな問題に



支援を利用する人たちへのセミナー

対して多面的にアプローチし援助を行う。深刻なケースでは、不登校、ひきこもりの背景に貧困や虐待等多重に困難を抱えている子どももいるため、専門機関と連携を図りながら継続的に援助している。

## 若者による訪問支援

SSF の訪問支援活動は、大学生や 20 ～ 30 代の若者が中心となっていることが特徴である。家族や教師、専門家、カウンセラーは当事者から見れば、「大人」であり、自分とは異なる存在であるため、関係をつくりにくい。しかし、当事者から見て「お兄さん」、「お姉さん」にあたる世代が「家庭教師」としてかかわることは、心理的な抵抗も少なく関係がつくりやすい。また、当事者にとって、自分の将来のモデルや憧れの対象となりやすく、当事者の将来に向っての意欲を生みやすい。

訪問支援は専門性が求められるため、人間関係づくりの素養があるメンバーを選抜し、研修や実地訓練を重ねたうえで活動に送り出している。現在は約 130 名のスタッフがいるという。とりわけ、最初に当事者と接触し、関係をつくり上げるまでの支援は難易度が高く、リスクも高いため、キャリアを積んだ専門性の高いスタッフが担っている。

## 支援のためのゆるやかなネットワーク

SSF では、設立当初から、自分たちだけでできることには限りがあると考え、一貫して連携を重視してきた。そのため、「情報の一元化」と「緩やかな連携」を基調とし、700 以上の団体が参加している相談・支援団体のネットワーク「青少年サポートネットワーク in SAGA」など、さまざまなネットワークをつくっている。

SSF が訪問支援するきっかけは、6 割が保護者、特に母親からの相談で、4 割が行政関係者や学校関係者からの要請となっている。4 割が行政や学校関係者からの連絡が占めていることは、こうしたネットワークづくりに注力してきたことの現れだという。

SSF では、訪問支援を最後の「セーフティ・ネット」ととらえ、連携のネットワークを活かしながら、孤立した人々への支援を一層充実させていくことをめざしている。



訪問支援に携わるスタッフたちのミーティング

取材  
協力

特定非営利活動法人  
NPO スチューデント・  
サポート・フェイス

代表理事

たにぐち ひとし  
谷口 仁史 さん



## 「ひきこもり」状態にある人への支援



「オリーブの会」設立5周年記念講演会

## 事例2

## 保護者の視点から当事者と家族を支える取り組み

特定非営利活動法人

KHJ 香川県オリーブの会【香川県高松市】

<http://khj-olive.com/>

特定非営利活動法人 KHJ 香川県オリーブの会（以下、「オリーブの会」）は、「ひきこもり」状態にある当事者とその家族を対象に、同じ問題を抱える保護者の視点から子どもの自立と、親同士の連携等に関する支援事業を行っている。

平成14（2002）年6月に立ち上げられた「親の会」を前身とし、平成20（2008）年4月に、法人格を取得した。

「オリーブの会」では、年度ごとの登録会員制を採用しており、今年度は65家族が登録している。そのうち通常の月例会に参加する家族は、20～25家族である。

会では定期的なアンケートをとっており、だいたい22～23家族から回答が寄せられ、平均年齢30歳以上、親の平均年齢も60歳以上となっている。

## 当事者を抱える家族への支援の現状

当事者や親が抱えている「ひきこもり」問題で顕著なことは、親の高齢化、子どもの高齢化、ひきこもり状態の長期化があげられる。長期化するとともに、ほとんどの子どもが対人恐怖症を抱えるようになり、それに伴った神経症などの病理を抱えていながら、病院に行けない状況にある。

また、「ひきこもり」に関する報道などでは、事件性のあるものが中心に取り上げられるため、誤解や偏見が生じ、周囲に相談できず孤立してしまう状況がある。当事者の居場所をつくらうとした際も、小さい子どもをもつ近隣の住民の不安の声も一部あったという。

また、親の会では対応している対象は「ひきこもり」といっても、部屋から出られない状態から、昼間は外に出られないが夜間は買い物などの外出はできる状態まで、さまざまである。いずれの場合においても、家族だけでの解決は困難で第三者の支援が必要であるという。しかし、当事者は第三者の支援を拒否する傾向があるため、より専門的な支援の充実が望まれるという。

## 保護者同士が助け合う場と機会の創出

「オリーブの会」の主な活動は、定期的な月例会を中心に、グループ・カウンセリング、当事者の居場所の運営、年1回

程度の特別講演の開催などである。

月例会では、「ひきこもり」の子どもをもつ家族が「ひきこもり」状態にならないように、互いの苦労や悩みを受け止め合ったり、励まし合うことができるようにしている。

また、他の親の話を聞いたり専門家のアドバイスを聞くことにより、自分の子どもへの対応の確認をする場でもあるという。

「ひきこもり」の子をもつ親にとって、専門家による支援も重要だが、同じ悩みをもつ親の存在が大きな心の支えとなっている。最近では、定年後の父親の参加が増えているという。

当事者の「ポパイの会」は、当事者が安心して居られる場、誰かに悩みを聞いてもらえる場、コミュニケーションの練習の場として、空き屋を活用した若者の居場所づくりを実施。また、現在では、「さぬき若者サポートステーション」と連携したパソコン教室などを通して、ひきこもりの自立支援も実施している。

専門家による個人カウンセリングと家族相談を、毎月1回のペースでそれぞれ実施している。個人カウンセリングには、親とともに当事者が来ることもある。

## 取り組みにおける今後の課題について

「オリーブの会」や他の支援団体・機関とつながっていない当事者や家族は、まだまだ潜在的に多数いると考えており、新聞などを通じた情報提供などを今後も続けていきたいと考えている。また、地域のなかでの初期の相談窓口の拡充などが望まれる。

そして、長期化した「ひきこもり」の子をもつ親に共通の悩みは、「親亡き後」の子どもの将来である。就職も決して容易ではないため、当事者がある程度動けるようになって、その後をどうしたらよいか道筋がみえないことも多い。例えば、作業所のような形で、当事者のペースで人間関係をつくり、働くことのできる場所を確保することができないかとも考えている。

「ひきこもり」の当事者や家族を支援していくうえでは、専門家や医療機関、「働きたい」という当事者をサポートする団体や機関と受け入れ先の協力が必要である。そのため、「オリーブの会」では、今後も、さまざまな機関や団体とのネットワークを密にしながら、当事者の回復とともに、就労場所を見つけることを目標に、活動を継続していく方針である。

## 取材協力

特定非営利活動法人  
KHJ 香川県オリーブの会

理事長

かわい とみえ  
川井 富枝 さん

## 事例3

## 当事者や保護者の “心の癒し”をめざす 居場所づくり

「元気フリーさろん」【埼玉県川口市】

平成12(2000)年4月に開設した「元気フリーさろん」(以下、「さろん」)では、学校に行きたくても行けないで悩んでいる、家にひきこもりがちで友達もいない、仲間とうまくやれず、人間関係に悩む人たちの交流の場を提供している。児童、若者だけでなく、子どもの不登校やひきこもりで悩む保護者や家族に対しても相談対応等を行い、本人たちの問題の見方の幅を広げて、自ら解決を見出すことができるよう支援している。

### 「さろん」への参加者と主な活動内容

「さろん」での支援にかかわるスタッフは、埼玉県カウンセラー協会の講座を受講し認定を受けたメンバーがボランティアで行っている。代表の村田さんは、川口市社協ボランティアセンターで紹介を受けたことがきっかけで、「さろん」にかかわるようになった。会員は現在11名。ひきこもりや不登校の児童・生徒、対人関係がうまくいかない30代の青年を中心に、精神的な悩みを抱えている児童・生徒、保護者などが定期的に集まっている。

参加のきっかけは、新聞に掲載されたコラム記事や、川口市社協ボランティアセンターからの紹介、インターネットでの検索など、さまざまである。

日常的な活動は、毎週土曜日の午後2時から午後5時まで、かわぐち市民パートナーステーションの多目的室を借りて行われる。毎週集まってくる利用者たち一人ひとりが「一週間のできごと」を発表するプログラムがあり、仲間の考え方や思っていることを理解する能力を高めるとともに、ゲームなどを通して他者とのコミュニケーション能力を高めている。また、「さろん」では、年間行事として、川口市主催の「たたら祭り」の際に、当事者たちが踊りに参加したり、町内の清掃に関するボランティア活動や、映画鑑賞、花見、花火観賞等を行っている。



第三者の立場から寄り添うことが「さろん」のモットー

### 「さろん」活動のなかでの配慮

支援において、まずは当事者自身が集団のなかで話ができるようになり、社会的な自信を取り戻し、就労に向けた自立を果たすことをめざしている。

不登校やひきこもりの場合、保護者から見た状況と、当事

者自身が抱えている真実(気持ち)とが、しばしば異なるために、保護者と同伴でやってくる当事者には、スタッフが保護者の話を聞いた後で、必ず当事者と2人きりで話をし、その声にも耳を傾けることを大切にしている。

スタッフの粘り強いアプローチによって少しずつ形成されてきた信頼関係をもとに、当事者の本音の部分を引き出し、保護者ではない第三者が寄り添うことで、当事者たちの心の負担を取り除き、自信や安心感につなげていく。

一方、「さろん」そのものの運営上の課題などについては、保健所と連携を取りあっているほか、不登校やひきこもり、ニート支援に関して川口市内を中心に活動している団体のネットワーク「Fネット」(10団体)にも参画し、他団体との情報交換も図っている。

また、当事者の就職活動への支援も行う場合もある。面接はプレッシャーがかかりやすいため、場合によってはスタッフが同行することがある。信頼しているスタッフが一緒にいることで安心して望むことができ、一度スタッフ同行による面接を体験したことで、次回以降は一人で行けるようになった当事者もいた。



当事者の希望によって実施された料理教室

### 居場所があることの効果と今後への抱負

「さろん」を利用している当事者たちは、週に一度だけであっても外出する予定があり、社会とかわり、仲間に出るとい理由から、「さろん」に来ることを楽しみにしている。また、たとえ出て来られなかった時でも、地域のなかに、家庭以外の居場所が「ある」というだけで、心の安定につながるという効果を生んでいる。

かつては川口市外に住んでいたため、「さろん」の存在を知らずに10年間ひきこもり状態にあった当事者が、川口市への転居に伴って「さろん」に通うようになり、元気を取り戻して就職ができた例もある。

「さろん」では設立以来10年を迎え、さらにその存在を広く地域に知らしめ、困難を抱えているより多くの当事者や保護者が参加しやすくなる方法を模索中である。そのためには活動に対する応援者を増やし、その人たちからの口コミに期待したいと思っている。

それと同時に、同じような「居場所」づくりの活動が、多くの地域のなかで増えていくことを願っている。

取材  
協力

「元気フリーさろん」

代表

むらた ようこ  
村田 陽子 さん

